

「忠臣蔵を考える」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

赤穂事件関係年表

將軍	年号	西曆	月日	事項
家光	正保二	一六四五	六・三三	浅野長直、播磨国赤穂に移封
家綱	寛文元	一六一一	赤穂城完成	
	七	一六六七	八・二	浅野長矩、江戸本邸に生まれる
	延宝三	一六七五	三・三三	浅野長矩、襲封（9歳）
綱吉	天和三	一六八三	二・六	浅野長矩、勅使饗応役を拝命（17歳）
			三・七	吉良義央、高家肝煎となる（43歳）
			三・七	浅野長矩、勅使饗応役を勤める
			四・九	めぐり（12歳）、浅野長矩に輿入れ
			一一	柳沢保明、側用人となる
元禄元		一六八八	二・二一	中山安兵衛、高田馬場で決闘（25歳）
七		一六九四	一・二八	吉良義央、年頭の賀使として御所に参内（61歳）
			二・四	浅野長矩、勅使饗応役を拝命
			二・九	吉良義央、江戸に帰着
			三・一	勅使・院使、江戸に到着
			三	勅使・院使、將軍綱吉に拝謁
			四	<b>浅野長矩、吉良義央に刃傷。長矩、即日切腹（35歳）</b>
			一四	浅野大学、閉門。赤穂受城使任命
			一五	浅野家上屋敷等収公
			一七	急使、赤穂に到着
			一九	赤穂藩で藩札引き替え開始
			二〇	吉良義央、役職辞任
			二六	赤穂城中において大評定始まる
			二七	受城使、赤穂城下に到着
			四・六	城明け渡し完了
			一九	大石内蔵助、赤穂城下を退去
			六・二五	大石内蔵助、京都山科に転居
			二八	吉良義央、呉服橋門内から本所一ツ目へ屋敷替え
			八・九	吉良義央、隠居
			一三・三	第一次山科会議
			一・二	萱野三平切腹
			一四	第二次山科会議
			二・五	



し所をまた二太刀ほど切られ申し候。上野介殿そのままうつむきに倒れ申され候。

吉良殿倒れ候と大方とたんにて、その間は二足か三足ほどの事にて組み付き候やうに覚え申し候。

右の節、我等片手は内匠殿小刀の鏢にあたり候ゆゑ、それ共に押し付けすくめ申し候。その内に近所に居合せ申され候高家衆ならびに内匠殿同役左京殿など駆け付けられ、そのほか坊共も見及び候ところに居合せ候者ども追ひ追ひに駆け来り、取り押さへ申し候。…(中略)…それより内匠殿をば大広間の後の方へ何れも大勢にて取り囲み参り申し候。その節、内匠殿申され候は、上野介事この間中意趣これあり候ゆゑ、殿中と申し今日の事かたがた恐れ入り候へども、是非に及び申さず、打ち果たし候由の事を、大広間より柳之間溜り、御廊下杉戸の外までの内に、幾度も繰返し繰返し申され候。その節の事にてせき申され候ゆゑ、ことのほか大音にてこれあり候。高家衆はじめ取り囲み参り候衆中、「もはや事済み候間、だまり申され候へ。あまり高声にていかが」と申され候へばその後は申されず候。

この時の事ども、後に存じ出し候に、内匠殿心中察し入り候。吉良殿を討ち留め申されず候事さぞさぞ無念にありしならんと存じ候。誠に不慮の急変ゆゑ、前後の思慮に及ばず、右のごとく取り扱ひ候事是非なく候。…(梶川氏日記)

② 年始公家衆御馳走人浅野内匠頭は、…兼ねて吉良と挨拶宜しからず。殊に度々伝奏屋敷にても、吉良は高家年老の人にて、内匠殿は年若、尤も公家衆などへ挨拶等もいまだ初々しきにより、吉良を相頼るといへども、とかく吉良何とやらん厳めしく、内匠兼々存じよらる由。

然る所に三月十四日公家衆登城、…大廊下千鳥の間の先の方へ吉良相詰め罷りあり。内匠頭は千鳥の間の方より来る。その席ををいて堪忍ならざる事にや、惣じて内匠頭は気短かなる兼ねて人の由、吉良を見付けて小さ刀を抜き打ちに眉間を切る。烏帽子に当たり、烏帽子の縁までにて切り止まる。時に吉良横うつ向きになるところを二の太刀にて背を切る。これも刀の寸は短く、その身は気せき、太刀先下がり、やや皮肉の間まで、長さは六寸余も切れる。疵浅し。額の疵は骨に当たり、少々疵深し。

…吉良は高家衆の部屋まで引き取る。当番本道方は津軽意三、外科方は坂本養慶、まづ血を止め療治致すべしと大目付衆より指図これあり、薬を用ゐ外治致さるといへども、血止まらず元氣薄くなる。

これに依り、御老中御指図の由にて大目付仙石丹波守、公家衆の内、畠山下総守へ申され候は、栗崎道有を早く召して療治致すべしとの事に付き、畠山下総守より急ぎ手紙上封して御小人目付衆私宅へ右の手紙持来る由。吾はその節、神田明神下酒屋伊勢屋半七と申す者、癰腫を煩ひ療治最中の時、宿より右の封じ状急ぎ持ち来たる。披見するに只今殿中に於いて吉良上野介不慮の儀これあり、手負に付き、大目付仙石丹波守指図のまま申し遣し候間、早々急ぎ登城これあるべく候。以上

三月十四日

畠山下総守

栗崎道有様

右のごとくの文言にて封状来る。吾ただごと存ぜず、大勢手負もこれありや、まづ急ぎ登城致すところに、大手の御門より人止めにて、誰をも出入ひしと相止む時に、吾名を申し立て、御用召にて登城致す由申すに付き、相違なく御門々を通る。…さて直ちにまづ吉良殿部屋へのぞき、見分するに、内外当番の医師、付き添ひ居り申されども、

血いまだ止まず、ひたと生あくび出て、……

一、治し方額筋交眉間ひたいすぢかひまみやいの上の骨切れる。疵の長さ三寸五、六分、熱湯にてあたため洗ひ、小針小糸にて六針縫ひ、直にうすめちやを付けふたにも薬を付くる。背の疵浅し。然れども三針縫ひ、仕掛け薬右同断なり。巻木綿は幸い下着の白帷子を引きさき、随分手ぎはよく巻き包み置きて、……それより吉良氣をしづめ、湯吞所より湯を取り寄せ、茶碗に食を入れ湯漬けにして焼塩少々相求め、二碗湯漬けをこれ用ふと、ひとしほ元氣常のごとくに見えるなり。……

(栗崎道有記録)

### ③ 浅野内匠家来口上

去年三月、内匠儀伝奏御馳走之儀に付、吉良上野介殿へ意趣を含み罷り在り候処、御殿中に於いて当座遁れ難き儀御座候か、刃傷に及び候。時節場所を弁へざる働き無調法至極に付き、切腹仰せ付けられ、領地赤穂城召上げられ候儀、家来共迄畏れ入存じ奉。上使の御下知を請ひ、城地を指上げ、家中早速離散仕り候。右喧嘩之節、御同席御抑留之御方これ在り、上野介殿討留め申さず、内匠末期残念之心底、家来共忍び難き仕合に御座候。高家御歴々に対し、家来共鬱憤を挟み候段、憚に存じ奉り候得共、君父之讐は、共に天を戴くべからざるの儀、黙止し難く、今日上野介殿御宅え推参仕り候。偏に亡主之意趣を継ぎ候志迄に御座候。私共死後、若し御見分之御方御座候はば、御披見願ひ奉ること、かくの如くに御座候。以上

④ 去年吉良上野介義央がもとにをし入て、主のために報讐せし故浅野内匠頭長矩が家臣大石内蔵助を初め四十六人の輩、国禁を犯し党をむすび、飛具を用ひ、公をはぐからずとて共に死を給ふ。よて兼て召あづけられし細川越中守綱利が邸には目付荒木十左衛門政羽、使番久永内記信豊、松平隱岐守定直が邸には目付杉田五左衛門勝行、使番駒木根長次郎政方、毛利甲斐守綱元が邸には目付鈴木次郎左衛門福一、使番齋藤次左衛門利常、水野監物忠之邸には目付久留十左衛門正清、使番赤井平右衛門時尹まかりのぞみ、大目付仙石伯耆守久尚、目付長田甚左衛門長視命をつたふ。内蔵助はじめ此輩の子弟はみな遠流に処せらる。

表高家吉良左兵衛義周も、その夜のはからひよからずとて、采邑収公せられ、諏訪安藝守忠虎にあづけらる。(日記)

(越中守綱利にあづけられしは、大石内蔵助、……。隱岐守定直に預られしは内蔵助が子主税、……。甲斐守綱元に預られしは岡島八十右衛門、……。監物忠之に預られしは間十次郎、……。以上四十六人なり。

さても此一公案むかしより区々の私言やまず。其故は、かゝる忠義の輩を褒顕せらるゝまではなくとも、常人の刑をもて、結党の科に処せしめられし事、人ごとにいかにも口惜き事なりとてなり。そは当時も、其義を賞して助命せんといふもあり。又は此輩が主のためにせしをもて、助られんに於ては、此後罪蒙りしものゝ臣子報讐を名とし、ひがふるまひして、大乱を引出すもとひとなるまじきにもあらずといふもあり。在朝諸大臣の議一決せざりしかば、日光門主公弁法親王に議せられしに、かれら年月身をくるしめ思ひを焦し、主の仇を報ぜしはさる事ながら、その志ははや成りぬ。今はこの世に思ひのこす事なければ、公の刑に身をまかせ奉らんとこひ出ぬる上は、今さらその罪をゆるし給ふとも、彼等再び他家に身をよせ、二君に仕ふべきにもあらず。あたら忠義の士を、山林窮谷に飢餓せしめんよりは、公より武士の道をたてゝ死をたまはらんには、彼

等が志も空しからず、公の刑法も正しく、かれもこれも事かゝらず、天下の公論たるべしと定られしかば、みなこの義言に決したりといへり。……)

(『徳川実紀』元禄一六年二月四日条)

\* 『徳川実紀』は江戸幕府が編纂した徳川家の歴史。全五一六卷。文化六年(一八〇九)着手、嘉永二年(一八四九)成立。

⑤ 小野寺十内から妻への手紙(内匠頭刃傷の翌月)

……我等は存じの通り当家の初めより小身ながら、今まで百年御恩沢にておのおのを養ひ、身あたたかに暮し申し候。今の内匠殿には格別の御情けには預らず候へども、代々御主人くるめて百年の報恩、または身不肖にても一族日本国に多く候に、かやうの時にうろつきては家の傷、一門の面汚しも面目なく候ゆゑ、節に至らばいさぎよく死ぬべしとたしかに思ひ極め申し候。老母を忘れ妻子を思はぬにてはなけれども、武士の義理に命を捨つる道、是非におよび申さず候。合点して深くなげき給ふべからず。母御人様いくほどの間も有るまじく候まま、いかやうともして御臨終を見届け給はるべく候。年月の心入れにて如才有るべしとは露ちり思はず、申すに及ばず候へども頼みまゐらせ候。……

四月十日(元禄十四年)

おたんの

十内

⑥ 大高源五から母への手紙(討ち入りの三ヶ月前)

……武士の道をたて候て御主の仇をむくひ申すまでにて、まったく天下へ対し奉り御恨み申し上げるにて御座無く候。然れども、いかなる思し召し御座候て、天下へ御恨み申し上げたるも同前にて、我々どもの親・妻子御たり御座候とても、力及び申さず候。万一さやうの事に成り候はば、かねて仰せられ候通り、何分にも上よりの御下知の通り、尋常に御覚悟成らるべく候。御早まり候て御身を我と御あやまち成られ候御事など、くれぐれ有るまじき御事にて候まま、必ず必ずさやうに御心得成られ候べく候。……あつぱれ我々兄弟は侍の冥利に叶ひ申したる儀と、浅からぬ本望に存じ奉り候。……私三十一、幸右衛門二十七、九十郎二十三、いづれもいづれも屈強の者どもにて候。たやすく本望を遂げ、亡君の御心を安め奉り、未来閻魔の金札の土産に供へ申すべく候まま、御心安く思し召し、ただただ御息災にて何事も時節を御待ち成らるべく候。御<sup>よはひ</sup>齢もいたふ御傾き、いくほどあるまじき御身にさぞ御心細く、便りもあらぬかたに乏しく、月日を御凌ぎ遊ばし候はんと存じ奉り候へば、いかばかり心憂く候へども、その段力及び申さず候。……幸ひかな御法体の御身にて御座候へば、この後いよいよもつて仏の御勤めのみにて憂さも辛きも御紛れまし、未来の事、朝暮れに御忘れなく、世も穏やかに御座候はば、寺へも節々御参り遊ばし候べく候。ひとつは御歩行御養生にも成り申し候べく候。乳母にもあきらめ候やうに、よく仰せられ下さるべく候。かしく。

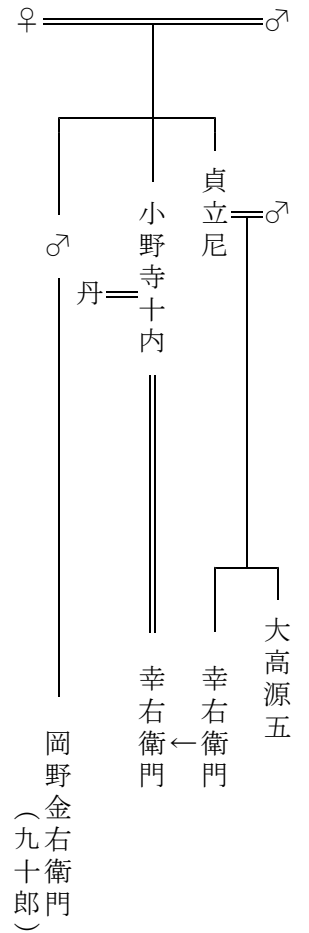
元禄十五年

午年

九月五日

大高源五

母御人様 進上



⑦ 十七人衆切腹相済申候。…扱後に場所清メ申ため真蔵院へ御奉行所より申参候得共、不能其儀候。…「十七人の勇士共ハ御屋敷の能キ守神」と被為思召候との御意承候。…：残ル御三人様にてハ場所を清メ申候由。…其後御心安キ御客様御出之節、切腹の場所を「名所にて候」と御挨拶被成候と及承候。  
(堀内伝右衛門筆記)

⑧ 次ノ間ニテ若衆之咄しに矢頭右衛門七と申者十何歳ニか成申候。江戸はしめてニて候。礒貝十郎左衛門引廻し申候。彼もの親は京都におゐて病死仕候。果候刻右衛門七へ申聞候ハ、「内々内蔵助と申合たる事志を不遂果候之義不及是非次第なり。汝志をつき候へ」と申候へハ奉得其意候由ニテ今般の列に加り申候。叔父ハ越後之太守松平大和守様御家中ニ居申候。是ニ母を預候て母子をも道中荒井迄参候処、若輩と申初旅故女切手を持参仕候事を不存荒井より立帰申候。  
(堀内伝右衛門筆記)

⑨ 赤穂少年義士の実像追う 12月に前橋文学館で企画展  
忠臣蔵で有名な赤穂四十七士で、17歳の若さで討ち入りした矢頭右衛門七教兼(やとうえもしちのりかね)をテーマにした企画展が12月、前橋文学館(前橋市千代田町)で開かれる。近くの大蓮寺に右衛門七の母の墓がある縁で、地元の歴史研究家らが初めて企画。各地に残るわずかな資料から、短い生涯を駆け抜けた少年義士の実像に迫る。

● 四十七士・矢頭右衛門七教兼  
右衛門七の父は、赤穂藩で浅野内匠頭から勘定方(財務担当)を任されていた矢頭長助教照(やとうちようすけのりてる)。右衛門七も内匠頭にかわいがられ、討ち入りの4カ月前に亡くなった長助の遺志を継ぎ、大石内蔵助に直訴して吉良邸討ち入り(1702年)に加わったという。翌年に切腹し、ほかの義士とともに東京・泉岳寺に葬られている。右衛門七の死後、母のいと妹3人は縁戚に当たると松平家の家臣団に身を寄せた。松平家の前橋転封(1749年)に伴い前橋に移ってきたとみられ、3年後に死去し大蓮寺に眠っている。るいの墓は1945年の前橋空襲で破損したため、戦後復元した墓とともに敷地内に安置されている。…  
(平成二五年七月一六日 上毛新聞)